
ことばの怪獣

クルクルココロ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ことばの怪獣

【Nコード】

N4340U

【作者名】

クルクルココロ

【あらすじ】

コウタはことばの怪獣に言葉を食べられてしまう。コウタはことばの怪獣の正体を掴もうと外に出た。果たしてそこでコウタが見たものとは……………。

(前書き)

是非、縦書きにして読んでみてください。

「お母さん！早く本を閉じて！」
コウタは叫んだ。

ドシン、ドシン、ドシン

大きな大きな足音が聞こえる。とてつもない大きさだ。そして、その音がするたびに家の中のものが揺れた。特に本棚が揺れた。僕は本棚にきれいに並べてある本が落っこちないかとひやひやしたが、どうやら大丈夫そうだ。だって僕がついこの間テープでしっかりと固定したんだもん。絶対大丈夫だ。

「コウタ？もう行ったかしら？」
お母さん何言ってるんだ。静かにしてよ。食べられちゃう。僕はジエスチャーで静かにするようにお母さんに伝えた。右手の人差し指を口に当てて、口を大きく横に開いた。

ドシン、ドシン、ドシン……

足音が段々小さくなっていく。どうやらあいつは行ってしまったようだ。

「お母さん。もう大丈夫だよ。あいつは行っちゃったみたい」

お母さんは安心したみたいで大きく息を吐き出した。

「コウタ？大丈夫だった？ちょっとしゃべってみて」

僕はいつもどおり五十音順に発声練習を試してみた。あいうえおかきくけこさしすせそ……。なにねのはひ？あれっ？なにねの？

「コウタ”ぬ”が食べられてる！」

お母さんは大慌てで本棚から辞書を取り出した。

「やっぱり”ぬ”の欄がまるつきり全て食べられているわ！」

僕はお母さんの慌てぶりをベッドの中から見ている。
僕はその日以来”ぬ”がしゃべれなくなった。

ドシン、ドシン、ドシン

あいつがまた今日もやってきた。今度は一体何を食べていく気なんだ。

「コウター！しっかりとベッドの中に隠れていなさい！」

そんなこと言われなくなつて最初から隠れているよ。隠れていないけりやとつくに食べられているさ、全く。

僕はベッドの中で羊の数を数えた。だってそうでもしなけりや怖くて仕方ないんだもん。あいつは絶対に恐ろしくでかいに決まっている。そして、大きな目を二つ持っていて、そう、その目は黄色く濁っているんだ。そうに決まってる。体はたぶん真っ黒なんだ。大きくなっばがついている。体の表面はとてゴツゴツしていて石みたい
に硬いんだ。

そうやって想像しているとさらに僕は怖くなってきちゃって思いっきりシートにくるまらずにはいられなくなった。とても怖くてしようがない。

ドシン、ドシン、ドシン……

「コウタ？大丈夫だった？食べられてない？」

お母さんがシートをめくって僕に話しかけた。どうやら今回は大丈夫そうだ。

「コウタ、念のために確認しておきましょう。五十音順に言ってみて」

あいうえおかきくけこさしすせそ……はひふへまみむ。

はひふへまみむ？あれっ？

「コウタ！」ほ”がなくなっているわ！」

僕はそれ以来”ほ”がしゃべれなくなった。

一体あいつは何を目的にして僕の言葉を食べているんだろう。確

かに言葉は力には違いないし、言葉には感情がこもっている。聖書でも言葉は神と共にあったと記されているし、僕自身も言葉は神だと思う。じゃあ、あいつは一体何者なのだ。僕から言葉を奪って何に利用しようというのだ。もしかすると目的などないのかもしれない。でも、それだったらもっとことは悪い。あいつに目的がなければ僕はいつの単なる憂さ晴らしということになってしまっただけなはいか。ちくしょう。一体あいつは何者なんだ。今日という今日は絶対に正体をつきとめてやる。

僕は玄関を出て、外であいつを待ち構えた。

ドシン、ドシン、ドシン

あいつが現れた。……何だこいつは、虫じゃないか。チヨウのような蛾のような。分からん。こんな虫は初めて見たぞ。たぶん生物学者でも、これは新種だと言うに違いない。いや、もしかしたら博物書の隅っこのほうに載っているのかもしれない。いずれにせよ、学者でも何でもないこの僕には分かるわけがない。それにしても、どうしてこの……何と呼ばばいいのだろう。この虫の名を誰か教えてくれ。ちくしょう。何なんだこの虫は。僕の”ぬ”と”ほ”を奪ったくせにこいつの名前がないなんてそんな滑稽な話があるか。しょうがない、こいつを「ほぬ」と名付けよう。いや、それではだめだ。誰かほかの人に説明するとき困る。僕は”ほ”と”ぬ”が話せないのだ。これには参った。

そうこうしているうちにあいつはどこかへ飛んでいってしまった。「コウタ！そんなところで何してるの！食べられちゃうわよ！」

お母さんが窓から顔を出して僕に怒鳴っている。僕は急に不安感に襲われた。あいうえおかきくけこさしすせそ……まみめもやゆ。まみめも？あれっ？

「ほら見なさい！」む”が食べられちゃったじゃない！」

僕はその日以来”む”がしゃべれなくなった。

今日こそは絶対にあいつを捕まえてやる。あの奇妙な虫だ。想像以上に小さかったけれども、あいつが僕の”ぬ”と”ほ”と”む”を食べてしまったことは間違いない。それにしても奇妙な虫がこの世界には存在するものだ。だが考えようによつてはとも頭のいい虫だともとれる。言葉を食べる虫。食言虫。そうだ、あの虫を食言虫と名付けよう。なんて素晴らしいネーミングセンスなんだ。

ドシン、ドシン、ドシン

食言虫がやってきた。相変わらずかわいい姿をしてやがる。でもこの姿にだまされてはいけない。こいつは僕の”ぬ”と”ほ”と”む”を食いやがった憎き食言虫なのだ。こいつを殺さない限り僕は一生”ぬ”と”ほ”と”む”を話すことができない。いや、待てよ。もしかするとこいつを殺したところで僕は”ぬ”と”ほ”と”む”を話せるようにはならないかもしれないぞ。こいつはすでに僕の言葉を消化して便として排泄してしまったかもしれないじゃないか。だが、もし本当にそうだとしたらどうすればいいんだ。僕がこいつを殺したところで僕の”ぬ”と”ほ”と”む”は返ってこない。それは困る。だって今後、ナメクジとかを恋人と一緒に見つけたとき

に、ああ、なんてぬめぬめしたナメクジなんだとかいう台詞が言えなくなるんだぞ。……んっ？そんなことをこれからの人生で話すことがあるだろうか。ちょっと待てよ。おれは今まで生きてきてどれだけ”ぬ”と”ほ”と”む”を発声してきただろうか。最近言った”ぬ”と”ほ”と”む”を含む言葉は何であっただろうか。ちくしょう。思い出せない。とにかく今はあの食言虫を追いかけろんだ。食言虫がいつも寝泊りしているところにあいつの糞があるはずだ。その糞を見つげるんだ。そうすれば僕の”ぬ”と”ほ”と”む”が戻ってくる気がする。

食言虫は始終大きな足音を立てている。足音という表現はおかしいな、羽音と言つべきだろうか。とにかくあいつは大きな足音に似た羽音を立てている。恐ろしい羽音だ。どんなふうに羽を動かせばあんな音が出せるのだ。僕はそんなことを考えながらその食言虫を追いかけた。

しばらく食言虫を追いかけっていると見慣れた景色が目の前に広がってきた。見慣れた郵便局、見慣れたコンビニ、見慣れたゴミ捨て場。ここは間違いなく僕の家の前所であった。そして、さらに食言虫を追いかけると僕の家の前に辿り着いた。食言虫は相も変わらず足音に似た羽音を出している。

僕はそこで食言虫を追いかけるのをやめた。おそらくこれ以上追いかけても無駄だ。食言虫は僕の近所を飛び回っただけで住処というものを持っていない。常に飛んでいるのだ。休むということはない。いつも人々の言葉を食べて、そして活動しているのだ。僕の頭の中にふと一つの答えが浮かんだ。あの足音、いや、羽音はもしかして人間の言葉を統合した結果出てきた便なのではないのだろうか。あの恐ろしい怪物の足音は人間の本性をばらんだ一見無意味でほとんど使われることのない言葉の怒りなのではないか。

「コウタ！早く家の中へ入りなさい！また食べられるわよ！」

母が窓から顔を出して叫んでいる。僕は仕方なく家の中へ入った。あいうえおかきくけこさしすせそ……なにぬねのはひふへ

ほまみむめも。あれっ？戻ってる。

「コウタ、今日は遅かったのね。補習が長引いたの？」

母が料理を取り分けて食卓に並べていた。

「いや、食言虫を追いかけていたら遅くなっちゃったんだよ」

「食言虫？ああ、あいつね」

母は知っているような素振りを見せたが、それが本当に知っている振りなのかどうかは僕には分からなかった。とにかく僕自身が言葉話せるようになったのが僕にとっては何よりも嬉しいことであり、ひいては母にとっても嬉しいことであると僕は思ったのであった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4340u/>

ことばの怪獣

2011年10月9日10時22分発行